学友と共に培った質実剛健の精神がいまに活きる

創業54年を迎えるアパレルメーカーの株式会社クイーポ。その2代目社長を務める岡田敏さんは学生時代のゼミ、サークルで経営を学び、社会に出てからはアパレル商社にて経験を積みました。クイーポに入社後は、経営者の真髄を創業社長から直伝され、2009年より2代目社長に就任。大学生時代の経験がいまのご自身に大きな影響を与えたといいます。

株式会社クイーポ
代表取締役社長
岡田敏さん
（昭57・経営）

おかだ・さとし●1960（昭和35）年生まれ。富山県高岡市出身。専修大学経営学部経営学科卒。大学を卒業後の昭和57年、小杉産業株式会社（現KOSUGI）に入社。平成2年、株式会社クイーポ入社。経理部に配属。常務、専務取締役を歴任し、平成21年より代表取締役社長に就任。

リスクにチャレンジするベンチャー企業の可能性を学ぶ

私は北陸の出身で、専修大学は進学先候補のひとつでした。東京の大学で、どのような学校かわかりませんでしたが、父親が知人に評判を尋ねて回ったところ「歴史ある、いい大学」と聞き、進学を薦められました。

大学時代を振り返ると、比較的真面目な学生だったと思います。私の学生生活には大きく３つの柱があって、「ゼミナール」、「サークル」、「寮生活」が学生時代の全てだったと言ってもいいでしょう。

ゼミナールは中村秀一郎先生に学びました。当時、経営学部、経済学部のゼミをお持ちで、「中堅企業論」という著書（共著）があり、私が卒業し、数年後には多摩大学の第２代学長（退任後、名誉学長）に就任されました。残念ながら2007年に他界されたのですが、先生のゼミは１年生の時からかなり良いという評判を聞いており、２年から４年までしっかり学ばせていただき、ゼミでは副ゼミ長をやらせてもらいました。

先生は大企業、中小企業などの枠にとらわれず、当時誕生してきたベンチャー企業に着目し、リスクにチャレンジする企業体の在り方を論じられていて、「大企業志向もいいけれども、伸びしろのある企業が面白いよ」ということを教えていただき、世の中を知らない私に新たな価値観が芽生えました。

サークルは「経営学研究会」に１年より所属し、ドラッカーなど経営学の何たるかを論じました。ゼミでは関東の学生による討論会がありましたが、このサークルには全国大会もあり、ゼミ、サークル、それぞれ違ったテーマで議論を戦わせていました。その時の他大学との交流は、成長の糧になったように思います。サークルでは代表となり、大学の討論会での司会なども務めました。

討論会の司会では、テーマに対して討論者と同等に詳しくなければならないため、研究は欠かせません。また重要なのは、どのようにディベートを決着させるか。学生同士ですから、どちらも主張を崩さず、結論が出ないことは目に見えています。私の役割としては、勝敗をつけるのではなく、お互いの主張を確認し、相手の意見を尊重するところに落ち着かせることです。討論テーマの研究、実際の討論会、そして司会と、非常に良い経験となりました。

寮生活は、大学進学と同時にスタート。富山県高岡市が運営する珍しい寮で、そこでは大学の垣根を越えて、先輩、同学年、後輩との交流があり、方言が飛び交う非常に濃い人間関係が出来上がっていました。イベントもあり、年に一度の寮祭では各自の部屋をスナックや、おでん屋にしたり。男子寮でしたが、その時ばかりは他大学の女子生徒も遊びに来て華やかになりました。

１年生から寮に入り、人間関係、住み心地もよく非常に居心地がよかったのですが、３年生に進級すると同時に退寮。一人暮らしをしたかったのが理由です。しかしこの寮生と、ゼミ、サークル生ともいまだに交流があり、私の人生の大きな財産になっています。

経営・企業研究を軸に、有意義な学生時代を過ごしてきましたが、卒業後の進路には悩みました。地元に戻って就職する道もありました。しかし父親がせっかく東京で学んだのだからと、東京で就職することを許してくれ、アパレル商社の小杉産業に就職したのです。

昭和57年、専修大学卒業式にて。前から3列目、右から2人目が岡田さん

専修大学で得た知見を体現する創業社長の経営姿勢に感銘

アパレルは華やかな業界ですが、イメージとは異なり、段ボールを担いで汗を流す仕事が多かったですね。最初は研修として物流センターに勤務し、その後、営業を担当して１年間は土日の休みがないほどハードでした。ただ、業界の流儀はしっかり身に付いたと思います。７年間務め、ご縁がありクイーポ社に転職。経理部から始まり、営業部に配属され、創業者である先代社長から非常に多くのことを学びました。

先代社長の印象に残っている言葉のひとつに、漢数字の「一」に関する話があります。曰く、「俺の考えはシンプルだが、シンプルがゆえに難しい。一という字はごまかしがきかない、習字でもボールペンでも、曲がればすぐにわかってしまう。ミスがあっても隠しようがない。誰が見てもわかりやすい、生き方、会社経営をせよ」と。経営の真髄を表していると思います。

株式会社クイーポは、今年で創業54年になりますが、服飾、ハンドバッグメーカーとしては後発の会社です。先代社長は新たな革製品のコンセプトで市場を開拓し、新風を送り込んだ人物。それまでのハンドバッグ業界では固いガチガチのバッグか、海外ブランドのライセンス商品が主流でしたが、そのような現状に疑問を持ち、独自の製品で勝負しようと、柔らかいカジュアルな革のハンドバッグを世に送り出したのです。それは業界にとってセンセーショナルな出来事で、一部大手からは叩かれたと聞きました。しかし、ニーズは確かにあり、新たな商品として大ヒットするのです。

先代社長が創設したブランド「genten」シリーズ。上質な本革の風合いで世代を問わず、幅広い層の女性に支持されている

東京都新宿区市ヶ谷の本社1階にあるクイーポショップ。最新のアイテムを手に取って試すことができる

既存の業界に風穴を開けるという発想を持っていた先代社長の仕事ぶりは、私がまさしく専修大学で学んできたことを体現しており、その経営哲学にいたく感銘を受け、私も大いに学ぼうと必死でした。「現状が順調であってもそれに慢心するな」という言葉はもちろん、多くのことを先代社長自身の行動で示していただき、明るく朗らかなお人柄で非常に魅力的な人物でした。

二十数年前、先代社長が「genten（ゲンテン）」というブランドを新たに立ち上げました。当時はプラダが全盛の時代で、ナイロンバッグで一世を風靡。そのナイロンの軽い素材に、重い革製品で勝負する。しかも、まださほど認

知されていなかった「エコロジーとファッションの融合を具現化」がコンセプトでした。その頃、常務取締役だった自分は「いま革製品は厳しいのでは」と反対したんです。「絶対にダメだ。全員が反対しても一人でもやる」と社長が決断し、結果、商品化に至りました。それが成功につながり、現在わが社の主力商品となっています。新たな価値を創設することが使命と言わんばかりの決断力です。

このような先代の経営理念を引き継ぎ、２代目となる私の代でも、社員、お客様、ならびにクイーポ社に関わりのある方たちが幸せになれるように発展を目指しています。会社が高品質の商品を提供することによって、社員がやりがいを持って仕事に取り組んでくれるならば、これ以上のことはありません。もちろん物心両面の充足を目指し、社員の年収もできるだけ上げていけるように努力しています。

ファッション業界はなにかと苦戦を強いられる時代です。内部を強化して100年目を迎えられるように、企業としての強固な経営基盤を築くのを目標にしています。

常務取締役、営業本部長を兼任していた当時、渡仏。現地の最新ファッションに触れた。

そのためにも女性の働きやすさという点に着目し、よりよい環境を目指しています。女性であっても男性社員並みの働きを求めますが、その分のリターンは男女の隔てなく用意されており、キャリアプランという点も同様です。特にファッション業界ですから、取締役にも女性を起用するなどして、一層の成長に向けて歩を進めています。

学生時代からの学びを通じて恵まれた書物や人との出会い

私の学生時代からの学びは運良く現在の仕事に活かされていますが、それ以上に人との出会いに恵まれたな、と感じています。いまの学生にも勉強はもちろん大切ですが、友人を増やすことが重要で、そのためにクラス、ゼミ、サークルと活動の場を広げてほしいと思います。

私たちのゼミOBも「中村先生を偲ぶ会」として年に１回集まって思い出話に花を咲かせ、近況を報告しあっています。そういった時間が大切で、本当に貴重だなと。ただ、その場で最近共通の話題は健康ですね（笑）。みんななにかしら身体に気をつかっていますから。

人生は長く、どこかで壁に当たることもあるもの。しかし、決して一人ではなく、どうやって信用できる人と相談して進んでいけるか、ということが大切だと実感しています。私自身、先代社長が会長になられてから助言をいただくことも多かったですが、当時の女性役員にも大変助けていただきました。創業社長と共に歩んで来られた方で、わが社の功労者でもあります。これからも、そういった人材を育成していきたいですね。

私は本が大好きで、愛読書は城山三郎氏の著作ですが、本からの学びは無限にあると思います。歴史小説、経済

JR市ヶ谷駅方向から望む本社屋

小説から生き方、考え方を学ぶことも多く、フィクションであれ、ノンフィクションであれ、本を読むことを大切にしています。

これからの夢としては、やはり仕事になってしまいますね。仕事を通じて、社員の人生に責任を持つこと。これを徹底して幸せになれる発展を追求したい。また日本のアパレルブランドは外資系にやられすぎだと思います。日本発信で高品質ブランドを提供できることを目指しています。あとは家族を大切にすることです。家族との時間があってこその自分だと思います。

創業者から受け継いだ夢のひとつに「genten村」という構想があります。自給自足が出来、病院などもあり、すべてにおいてそこで叶うというビジョンで、すでに長野県に遊休地もあり、将来にわたり長い時間をかけて実現できればいいなと願っています。

私の座右の銘は「質実剛健の姿を目指す」。どこかで耳にしたことがあると思ったら、専修大学の「質実剛健・誠実力行」の学風と同じです。専修大学で学んだからこそ、こうした信念ができたのかもしれませんね。この言葉を胸に、将来にむかってまだまだ頑張っていきたいと思います。　（談）

株式会社クイーポ　検索